

ヴィンコ・グロボカールの作品における「暴力」と「戦争」 ：前衛音楽による社会批判の手法の分析

代表研究者 坂本 光太
大分県立芸術文化短期大学 音楽科 助教

研究要旨

本研究は、フランス生まれのスロヴェニア系作曲家・トロンボーン奏者ヴィンコ・グロボカール（Vinko Globokar, b. 1934）の創作において、戦争や公権力による暴力といった社会的・政治的主題が、具体的にどのような前衛的音楽手法へと翻訳されているのかを考察することを目的とする。グロボカールは第二次世界大戦後の西欧前衛音楽を演奏と創作の両面から牽引した音楽家であり、ノイズや特殊奏法、複数言語の導入、演劇的要素の融合といった実験的手法を、社会への批判的メッセージの表出へと結びつけてきた。

グロボカールが演奏者の集団——独奏者から大編成のオーケストラにいたるまで——を社会の構造を映し出す縮図として用いてきたこと、すなわち社会的テーマを音で「描写」するのではなく演奏組織のあり方や奏者間の関係性に構造的に反映させてきたことは、すでに先行研究においても指摘されてきた。本研究は、この見方を出発点としながら、個々の作品において社会的テーマが具体的にどのような手法をもって作品化されているのかを、作品に即して検討するものである。

国家権力による逮捕と拷問を主題とする《変わらない一日》（1975）では、尋問される者・尋問する者・命令を執行する者・法を体現する者といった役割が個々の楽器と奏者に割り当てられ、独唱者が用いる音は場面の進行とともに一つずつ失われていく。本研究では、この作品とエリアス・カネッティの『群衆と権力』に基づく《群衆と権力と個人》（1995）を中心的に取り上げ、後者では無秩序な小編成オーケストラが「群衆」を、指揮者を頂点とする大編成オーケストラが「権力」を、四人の独奏者が「個人」を表象し、統合と熱狂へ向かう運動のなかに回収されない「個」が抵抗として残ることを論じた。さらに、移民と国境を主題とし複数言語の交錯によって疎外を体験させる《移民たち》（1982-85）、二群のオーケストラの対峙によって戦争を構造として現出させる《歴史の天使》（2000-04）を、同じ枠組みで捉えられる作品として検討した。

以上の考察を通じて、グロボカールにおける社会批判が、抽象的な理念にとどまらず、楽器編成・奏法・言語・空間配置といった具体的な音楽的手段へと翻訳されていることを、作品に即して検討した。これらの検討の一部は演奏会のプログラムノートとして発表し、またその土台として、グロボカール自身が演奏者と作曲家の協働や集団性について論じた論考の翻訳と解題を発表した。今後はさらに対象を広げ、グロボカールにおける社会的関与の手法を包括的に捉えることを課題とした。